

講義は「知力を使ったスポーツ」

私の米国留学体験



ニューヨーク●
ノースカロライナ州
アッシュビル★
アトランタ●



文・英文記事&写真
「HAKUMON HERALD」
中央大学英字新聞学会部長

加藤英樹

(総合政策学部政策科学科4年)



グラント元学長（左）と筆者

私は中央大学の交換留学制度を利用し、米ノースカロライナ大学アッシュビル校（UNCA）で、2015年8月からの10カ月間を過ごしました。

UNCAは、米南部ジョージア州の州都アトランタから車で3時間、ビールとヒッピー文化が根付く観光都市アッシュビルにある。学部生4000人程度の小規模リベラルアーツ大学です。

私が留学を志した理由は将来グローバルに活躍できる人間になるため、学生のうちに語学力、異文化についての理解力を養う必要があると思ったからです。

一年かけて準備した留学を実りあるものにするために私

は留学中に米国の社会問題について所属する英字新聞の記事にすること、そして帰国後にはTOEICで満点を獲得できる英語力をつけるという目標を設定しました。

さて、意気揚々と現地に向かったものの、初めの月は日本社会との相違に向き合うことで精いっぱい。大味でボリュームたっぷりの食事。目が会えば、知人でなくても笑顔で挨拶を交わし、雑談を始める人びと。私の目にはどの光景も新鮮に見えましたが、素直に受け入れられず戸惑うばかりの日々を

送っていました。



脳が汗だくだ

オリエンテーション後も私は留学生生活を充実させられずにいました。友人関係は悩みの一つでした。UNCAの学生の約8割は白人が占め、アジア系に至ってはたったの1%。言語、文化、人種の違いに自意識過剰な私は友人関係を前に進める一歩を踏み出せずにいました。結局、食事も街の散策も一人で言うという味気ない時間を過ごしていました。

しかし、悩んでいても埒が



明かないことは明白でした。そのことに気づいてからは留学の軸である「学び」に集中し、環境の変化で狂った歯車を軌道に戻すことに注力しました。

UNCAで受講した講義の多くはディスカッションが中心でした。挨拶を終えた教授の第一声は「今日は何をみんなで話そうか」。その日の疑問が解決されるまで全員が頭、手、そして口を動かしていました。

しかし、ここでも私は悩みました。語学力に自信がなく、発言できずにいたのです。

ある時、社会学の女性教授が「あなたは何に怯えて、発言しないのだ」と話しました。

語学力に自信がないことを話すと、彼女は「私1人では講義をやっても実りあるものにはできません。講義は互いの知を高めるための場であり、コミュニケーションの一部です。そこには正解もなければ不正

解もない。知力を使ったスポーツのようなものだと思えば気が楽でしょう」と言いました。

教授の言葉はクラスを「評価の場」と思っていた私にとって、心強いアドバイスになりました。それからは授業に臨む姿勢が変わりました。

意見を発信しようという姿勢に心を切り替えると、意見を聞いてもらうのだから相手の意見も真剣に聞こうとする姿勢が自然と生まれました。

集中を切らさず、相手の意見に耳を傾け、自分の頭で解釈し、さらに意見を発信することをひたすらに繰り返します。

1時間45分の講義が終わる頃には、脳は汗だく、疲れ果てました。しかし、それでも新しい発見や理解がさらなる学びの原動力となりました。大学での学びを「知のスポーツ」と表現したあの教授は私の留学生生活を語るうえで欠かせない存在です。



かけがえのない友人サム

積極的に授業に参加することで、同じ専門分野を学ぶ学生と徐々に交流が生まれました。今ではかけがえのない友人となったサムは、同校で政策科学科を専攻していました。

米国における民族の歴史という講義で、サムは「暴力的な社会運動が社会の変革のために時には必要だ」との意見を述べ、それに反対した私と彼の間に議論が起きたことが知り合ったきっかけです。

私は、暴力を振るっても何事も解決しない、それは道徳的に正しくないと語りました。

それに対し彼は「暴力は防衛のための最低限のものである」と、念を押したうえで「社会問題改善に一步を踏み出すときには誰かがリスクを取らなくていけないのだ」とも語りました。

彼は白人ながらも現地で現代の黒人解放運動(ブラック・ライブズ・マター運動)に参加し、人種差別が元となっている不公平をなくそうとこの運動に熱心に取り組んでいました。

その活動に反対する人びとから、ネット上で暴力を示唆するような声明が発信されることは日常茶飯事だと語り、暴力に怯えていては状況は進展しないと話しました。

サムとの議論から私の意見は現実味、説得力が欠けている空虚なものであったことを知りました。



キャンパス内に6つある学生寮の一つ



共に学んだ友人たち、左端がサム。
筆者は最後列で独特の表情をつくった



キャンパスでパブルサッカーに興じる学生たち

この経験を通し、実際の現場に立つこと、当事者と直接コミュニケーションをとることが社会問題を理解するために効果的であると気付きました。これは異文化理解にも共通する点だと思います。

ネット、新聞、書籍から得られる情報を基に行動を起こしても「本質的な問い」にはたどり着けないのではないかと思うのです。異文化理解も豊富な実体験なしには、それが解決しようとする偏見やステレオタイプに気付くことさえできないと考えています。

その後、人種問題に関心を持った私は、頻繁にサムとコミュニケーションを取るようになりました。

米国で育ち、米国の抱える問題を深刻に捉え、自主的に社会運動に参加する彼から学べることは、どれよりも貴重だと思ったからです。

彼からは人種問題をきっかけに米国社会の構造的差別について学びました。同時に私は日本の抱える問題についても彼に話し、意見を交えました。

学業面だけでなく私生活でもサムとは仲良くなり、感謝祭日には彼の家族が開くディナーに招待されるなどして交友を深め、今では互いの夢を語り合える親友になりました。

彼の紹介でブラック・ライブズ・マター運動を東ねる学生の1人に取材し、「HAKUMON HERALD」(白門へ

ラルド)に記事を書きました。

さて、初めはどうなることかと思ひ悩んだものの当初の目標をほとんど達成し、10カ月の留学生活を終えました。

教授、友人、日本の家族の支えが目標達成の支えであったことに気付いたのは恥ずかしくも帰国後、留学生活を振り返ってからのことです。

何かに没頭することも思い出作りにいそしむことも少なかったですが、私の留学は自分の弱さを知り、人との交流の尊さを体感することができた学び多きものとなりました。

地味な変化を支えた色とりどりの出会いに感謝し、この文章を締めくくりたいと思います。



□ 中央大学交換留学制度

世界35の国と地域、185の協定校のうち、学生交換を実施している協定校(世界28の国・地域の135校)に、学生を選抜し派遣する制度です。応募の手続きや資格

は協定校によって異なり、また本学において書類・面接審査を行います。留学中に修得した単位は本学の卒業単位として認められます。

2017年度の派遣先地域/人数は次の通り。北米・中米地域38人、ヨーロッパ地域53人、中東・アジア地域31人、オセアニア地域8人。